

魚津市教育センターだより179号
令和8年3月発行
魚津市教育センター
〒937-0053 魚津市林林町1-21
TEL (0765) 23-9161

『意思あるところに道は通ずる — 未来を創る「チーム」の皆さまへ —』 魚津市立清流小学校 校長 弥生 陽子

この春、私は校長としての役職定年を迎えます。教職に身を置いてから今日まで、数えきれないほどの子供たち、そして情熱溢れる教職員の皆さんと出会えたことは、私の人生において何物にも代えがたい財産となりました。

私の座右の銘は、「意思あるところに道は通ずる」という言葉です。若かりし頃、理想と現実のギャップに悩み、立ち止まりそうになったとき、この言葉は常に私の心の奥底で静かな、しかし確かな灯火となって道を照らしてくれました。そしてこの言葉の真意を、先生方の献身的な姿から改めて教えられた気がいたします。

先日、行われた研究授業での光景が、今も鮮明に心に焼き付いています。授業者である若手教員は、数か月前から「子供たちが自ら問いを見つけ、対話を通して納得解を導き出すような授業がしたい」という強い意思をもち、教材研究に励み、早い時期から準備を重ねていました。しかし、理想を追求すればするほど、迷いが生じ、悩みを抱える姿がありました。

そんな彼女を救ったのは、すぐそばにいる仲間との存在でした。放課後の印刷室、学年主任が助言し、同僚が資料作りを手伝い、「あの子たちをどう輝かせるか」を語り合った風景がありました。「この問いかけなら、あの子の目が輝くのではないか」「ここで沈黙を待つ勇気が、子供の思考を深めるのではないか」と、熱く語り合っていました。その光景は、一人の「意思」が仲間としての「意志」へと伝播していく瞬間でした。

当日の教室は、程よい緊張と熱気に包まれていました。普段は消極的な子供が、仲間の意見に触発されて力強く挙手をする。互いの考えを認め合いながら、正解のない問いに挑み続ける。そこには、授業者と子供たちの心が共鳴し合った学びの姿がありました。授業後、その教員が「挑戦して本当によかったです。子供たちの本気で学ぶ姿を見ることができました」と、語った晴れやかな表情。そのとき、確信しました。「意思あるところに道は通ずる」という言葉の先にあるのは、決して一人で辿り着く成功ではなく、仲間と共に切り拓く「感動」への道なのだ。

今の教育現場は、決して平坦な道ばかりではありません。山積する課題に、時に立ち止まりそうになることもあるでしょう。しかし、そんな時こそ、すぐそばにいる仲間にも目を向けてください。職員室は、単なる事務作業の場所ではありません。喜びを分かち合い、苦労を半分に分かち合える、「なりたい自分」を共に目指すための場所であってほしいと願っています。

そして「頼る」ということは、弱さではなく、チームとして子供たちに向き合うための「強さ」です。一人の意思が壁に突き当たったなら、仲間の意思を重ね合わせればいい。そうして生まれた「チーム力」こそが、子供たちの未来を開く鍵となるのです。

私たち教師の仕事は、未来を創る仕事です。私たちが互いを信頼し、学びを楽しみ、困難さをも挑戦として受け止める「生き方」そのものが、子供たちにとっての生きた教材となります。皆さんが手を取り合い、一歩踏み出す勇気をもち続ける限り、その先に続く道は必ず子供たちの輝く未来へと繋がっています。

「意思あるところに道は通ずる」。皆さんの歩む道の先に、豊かな実りと笑顔があふれることを祈念いたしまして、退任の挨拶とさせていただきます。



令和のとやま型教育推進事業 魚津市の取組報告

魚津市では令和5年度より市内全小中学校で「問題発見・解決型学習」をテーマに、とやま型学力向上プログラムⅢ期と一体的に研究を推進しながら、授業のアップデート（授業改善）を目指しています。また、今年度より「ふるさとキャリア教育」「幼小接続の推進」にも力を入れております。各校での取組について紹介します。



問題発見・解決型学習

【西部中学校】

授業改善＜授業評価アンケートを活用した授業改善、互見授業の実施＞と生徒が自己調整しながら学習を進めるための支援＜活動の見直しをもたせる工夫（タイムスケールの活用等）、課題解決に向けた複数の手立ての準備（ICT 機器を有効に活用した活動等）＞に取り組みました。課題解明研修や校内研修での互見授業の機会を通して、教師自身の授業改善のヒントを得られたり、新たな視点をもって授業改善を進めたりすることができました。今後も授業評価アンケートの結果を基に、さらなる授業改善をすすめていきます。

【東部中学校】

研修主題「自己実現に向けて主体的に考え、粘り強く行動する生徒の育成～問題発見・解決能力の向上を目指して～」に向かって、学び合いや生徒主体の課題解決学習を目指した授業実践に取り組みました。実践を重ねることで、苦手な生徒は「分からない」「助けて」と言えるようになり、得意な生徒は教えることでより深い定着につながりました。生徒からも「自分たちで考えるのは難しいが、先生の説明を聞くだけより理解できた」という声があがっていることから、生徒が解決したい、考えたいと主体的になれるような導入やしかけの工夫を今後もすすめていきます。

ふるさとキャリア教育

【星の杜小学校】

本校は国内初の3階建て木造校舎であり、地元産木材がふんだんに使用されていることから、創校以来、児童の愛校心育成のために「木育」学習を取り入れています。4年生では外壁の塗装、5年生では木材パネルの彫刻、6年生では設計士による講義を行いました。本校独自のこの取組によって、校舎への愛着と理解を段階的に育むことができます。

地域の野菜づくりの名人や農家、藍染や味噌店等の事業を営んでいる方、地域の祭り保存会の方等、ゲストティーチャーによる学習も取り入れました。ゲストティーチャーとの出会いが、人やものとの関わり方、地元愛を育み、キャリアの形成につながったと考えています。

【よつば小学校】

研究主題「人・もの・ことと豊かに関わりながら、主体的に学ぶ児童の育成」を具現化する学習活動を各学年の「ふるさとキャリア教育」に位置付け、実践を行いました。3年生では地域の関係機関と連携し、児童が地域の高齢者と交流する友愛訪問、4年生では地域の保存会の方から蝶六踊りの由来や踊りを学び、5年生では地域の産業と携わる方との交流を行いました。子供たちが地域の方と交流して学ぶことで、地域の方がふるさとを思う気持ちを実感し、自分の住む地域のよさに気付くきっかけとなりました。「人・もの・こと」と豊かに関わる体験活動について、各教科の学習との関連性や学年の系統性を考慮しながら、今後も考えていきます。

【清流小学校】

本校は、地域の人・もの・ことから学ぶ体験活動を推進し、ふるさとに愛着をもち将来にわたりふるさとを思い支えていく心の育成に取り組んでいます。4年生では西布施地区の特産物であるサツマイモについて学習し、地元の農家の方の指導のもと、苗植え、除草作業等を行いながらサツマイモを育てました。10月の清流フェスでは、収穫したサツマイモをPTA役員と協働して焼いもにして販売しました。体験活動を経て、生産者の工夫や苦勞に気付くだけでなく、地元の特産物のよさを広めたいと意気込む児童の姿が見られるようになりました。人・社会・自然に直接関わる体験活動により、児童一人一人が自分の疑問や関心を大切に「課題設定」をすることができました。

幼小接続の推進

【道下小学校】

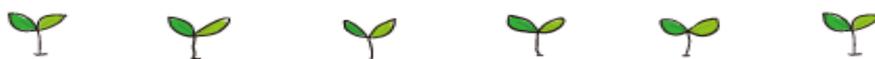
本校では、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図るために、①連携窓口の一本化、②自園・自校の教員の意識向上、③保育園との合同研修会実施に取り組みました。第1学年算数科「かたちあそび」の研究授業では、校区の保育園の先生方と授業構想の段階から打合せをしたり、事後研修会に参加していただいたりしました。活動場所であるマルチルームの環境を整えたり、多様な形の箱・筒・ボール等を用意したりするなど、自由で楽しい活動の場を保障したことで、子供たちは安心して生き生きと活動に取り組むことができました。今後も、幼保小架け橋期コーディネーターや校区の保育園の先生方とのさらなる連携を図ってまいります。

【経田小学校】

本校は、令和4年度幼児教育・小学校教育接続推進事業協力校の指定を受け、これまで幼稚園や保育園の園児と様々な交流を行ってきました。年間指導計画では、1・2年生の生活科、ふるさとキャリア教育、福祉教育に位置付けられています。7月に「社会生活との関わり」を意識した交流活動、12月に「協同性」を意識した交流活動を行い、3月にも1年教室での模擬授業や学校探検、模擬入学式を行います。また、夏季休業中に全教員が保育体験をしたことで、遊びや体験で学びを確立していること、保育園の学びが小学校につながることで、保育士と教員、保護者の三者が情報を共有する大切さを学ぶことができました。

魚津っ子の学び向上委員会の取組と成果

学力向上部会



「教頭会」の主な取組と成果

- 学校間（同校種、異校種）で授業を互見する機会を積極的に得られるよう、学校訪問研修や校内研修等の周知に努めました。異校種の授業を参観した教員からは「中学校の学びの土台は小学校にある」ことを実感したという感想もあり、学びの連続性を意識した授業づくりの重要性に気付く機会となりました。他校での授業参観に対する心理的な壁を解消し、互いの実践に学び合う意識の共有が今後の課題となっています。授業だけでなく、学校行事や行事に向けての指導も児童生徒とのかかわり方について学ぶ機会になることから、参観に対する校内体制づくりについて教務主任と連携して検討していきます。

「教務主任会」の主な取組と成果

- 年度当初にアラカルト研修を実施したことにより、各校の研修内容に生かすことができました。若手教員対象の有志教員によるミニ研修講座、若手教員が中堅教員に学ぶ互見授業、学年間での教科担任制やミックスウィーク（教科、学活、給食指導等の担当を交換する週）の実施により、若手教員、中堅教員、双方にとってよい学びが生まれる場となりました。今後は他校での授業参観に参加しやすい体制づくりを工夫していきます。
- 「ふるさとキャリア教育」について各校で地域の特徴に応じた実践を重ね、各校の実践を共有することで自校の取組に生かす手がかりを得ることができました。体験を基にしたまとめや振り返りを行うことで、学びの深まりがみられました。全ての教育活動がキャリア教育であることを教員一人一人が意識し、活動のねらいを明確にするとともに児童生徒の気付きを促すような活動を仕組んでいくよう市全体で取り組んでいきます。

心の教育推進部会



「教頭会」の主な取組と成果

- 「ふるさとキャリア教育」に関する各校の実践について共有しました。コミュニティスクールの組織の活用が「ふるさとキャリア教育」に大きな役割を果たすことを実感でき、取組の充実や目標達成のために地域の力の活用をさらに意識していく必要を感じます。YouTube 動画「魚津の偉人」（魚津市作成）の活用についても教員へ再度周知し、積極的な活用を呼びかけていきます。
- 「ふるさと魚津カルタ」の読み札・絵札の最終選定を行い、地図等の付属資料の準備を整えました。今後は内容の吟味・精選を進めるとともに、配布後の具体的な活用方法を検討していきます。
- 不登校児童生徒に対する校内支援体制についての情報交換を通して、活動内容や環境づくり、開所のタイミング等について振り返り、新たな取組へのヒントを得ることができました。今後さらに見直し、よりよい支援体制づくりに努めます。

「生徒指導協議会」の主な取組と成果

- 年度当初（4月）に啓発リーフレットを配布したことで、家庭でのいじめ早期発見やネットトラブル防止を啓発することができました。また、長期休業前等、児童生徒に対してネットに潜む危険から身を守る方法を指導する際の資料としても活用しています。
- WEBQU調査に関する見方や事例検討を含めた校内研修、学級づくり検討会等、各校で調査を学級経営に生かすための取組を行いました。チームや学校全体で学級の様子や気になる児童生徒の情報を共有することで、組織的な支援につながりました。
- 第19回子ども会議では、各校の取組発表を焦点化したことで、「子ども座談会」の時間をしっかりと確保することができ、活発に意見を交換することができました。次年度は、「魚津市子どもの権利条例」を含めた子ども会議の趣旨やテーマについて年度当初に共通理解し、各校の取組や児童生徒への浸透につなげていきます。

内地留学を振り返って

内地留学を終えて ―感情を起点とした児童生徒理解とチーム支援を目指して―

清流小学校 教諭 美谷 沙矢香

富山大学での内地留学は、講義や外部機関の見学、文献研究、そして現職の先生方や大学院生、大学生と共に学ぶことを通して、視野を広げ、自分自身の軸を見出す機会となりました。

石津憲一郎先生の講義における「変えようとするな、分かろうとせよ」という言葉が強く心に響きました。子供の表面的な不適応行動を変えようとするのではなく、感情にアプローチすることによって、その背景にある援助ニーズ(悩みや本当はこうしたいという気持ち)に迫ろうとすることが児童生徒理解の出発点となるという考え方で、脳の構造上、不安や怒りで大脳辺縁系が興奮している状態では、理性を司る大脳皮質への指導は機能しません。宝田幸嗣先生の講義では、教師が身近な大人の一人として、子供の不快感情を受け止め、言語化して返すコミュニケーションを図ることで、初めて子供の心に助言が入る「心のスペース」が生まれることを身をもって知りました。

一方で、目に見えない感情を扱うことは、簡単なことではありません。私自身、子供の言動を真に受け、冷静に対応できなかったことが多くあります。「教師＝指導」という固定観念も原因の一つでした。しかし、子供の「怒る」「あきらめる」「固まる」などの行動や一見「よい子」のように見せようとする過剰適応が、自分を守るための精一杯のSOSであることを知ったとき、その感情を一旦受け止めることで、関係性を構築し、自身の感情への気付きと行動選択を促すことができる大人の一人でありたいと改めて思うようになりました。

そのためには、チーム支援が重要です。富山県総合教育センター教育相談部が開発した「エピソードプロセス(ep)」を用いたケース会議は、子供の「心情の想像」と「リソース」(子供の強み等の内的資源や外的資源)を共有し、30分間で援助策を見立てる手法です。心情を想像するよさは、何よりも「子供自身が何に困っているのか」に焦点を置く点にあります。また、教職員自身の強みも子供にとってのリソースとなり得ることに気付くことによって、「自分もチームの一員として貢献できる」という自己効力感を抱くことにつながり、心理的安全性の高いチーム学校としての組織力にもよい影響があることを実感しました。

10月中旬からは、学びの多様化学校、適応指導教室、少年院等の外部機関にも足を運びました。そこでの学びは、「子供の自己決定をどう尊重し、支えるか」でした。学習や学校生活の中で、いかに選べる余地をつくるかが私自身の今後の課題の一つです。

「社会は常に変化するものであり、子供たちが個性や自己実現を達成するための支援の在り方も柔軟に変化し続けなければならない」と石津先生はおっしゃいました。子供たちのニーズも、周囲の環境や日々の生活によって刻々と変化していきます。その変化に対応するために、私自身も既存の枠組みに固執せず、柔軟に変化し、学び続けていきたいと思います。

最後になりましたが、このような貴重な機会をくださいました魚津市教育委員会の皆様、そして快く送り出してくださいました清流小学校 弥生陽子校長先生をはじめ諸先生方に、深く御礼申し上げます。



情報教育研修会

12月25日(木)教育センター研修室にて、情報教育研修会(Google コア plus 研修)を開催し、市内小中学校教員25名の参加がありました。株式会社 NTTEnc パートナー 永富 圭祐 様を講師に迎え、Google Workspace for Education の各アプリのおさらいを行った後、グループにて、日頃の業務とアプリを紐づけたり、実際に取り組みたいことの実現を目指した話し合いを行ったりしました。グループワーク後に全体共有を行ったことで、さらに考えを広げることができました。参加された方には、授業や校務における効果的な活用方法を各校にて広めていってほしいと思います。

(アンケートより)

- ・どのアプリで何ができるのかを丁寧に教えていただき、分かりやすかったです。グループで考えを共有する時間もあり、他校の皆さんが実践されていることをお聞きできたのもよかったです。
- ・小学校低学年でも授業で活用できそうなアプリがいくつもあることが分かりました。様々なアイデアを教えていただいたので、冬休みに研究を重ね、3学期の授業に生かしてみたいと思いました。



学びを生かして～若手教員研修より～

1～3年次教員を対象に年間3回、「児童生徒理解・困っている子供への関わり方」をテーマとして若手教員研修を開催しました。研修を通して学んだことや日々の実践について振り返ったことをまとめた参加者の報告書から、子供たちと真摯に向き合う姿勢が伝わってきました。いくつか紹介します。

- ・泣いている児童に対しては「痛かったね」「つらかったね」と共感することで児童が安心感を持ち、情緒の安定や教員への信頼が生まれると分かった。実際に自級で行ってみると、児童の表情が変わり些細なことでも気軽に話をしてくれるようになった。また、私自身も児童の変化について敏感に感じるようになった。(初任・小)
- ・学力や目に見える成果だけでなく、日々の行動や態度、友達との関わり方、課題に取り組む姿勢等、様々な側面から生徒一人一人のよさを見付け、そのよさを認め、育てていくことができるような支援をしていきたいと思った。2学期は授業中だけでなく、朝の時間や休み時間、生活ノートでのコミュニケーションを通して生徒との信頼関係を築き、様々な場面での生徒理解に努めた。今後も日々の観察や対話を通して、生徒の立場に立ち、多面的な生徒理解に努めていきたい。(初任・中)
- ・問題行動が多くみられる児童は、実は困っている状況にある児童である。「本当はこうしたいが、上手く言葉にできない」「本当は母と一緒に過ごしたい」など、自分の思いや気持ちを十分に表現できないことに困っており、暴言や暴力等の行動として表れてしまう場合があることが分かった。児童の気持ちに寄り添うとともに、適切な行動を教えながら丁寧に関わっていきたい。(2年次・小)

子供の思いに寄り添う見方は、教員が子供とともに歩み、成長していくための大切な土台になります。研修で得た若手教員のみなさんの気づきが、日々の小さな関わりの中で子供の姿をより温かく受け止める力につながっていくことを願っています。

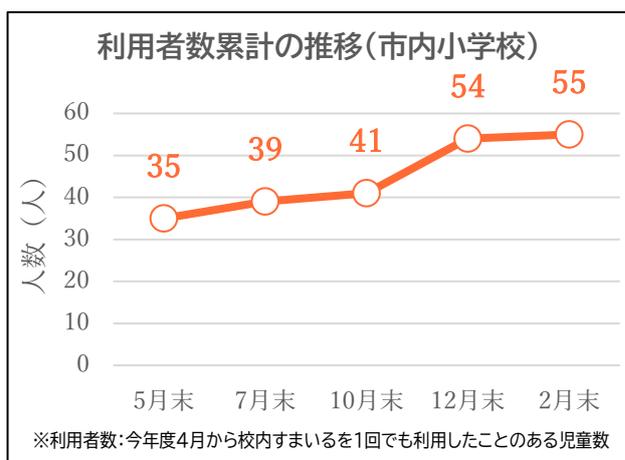
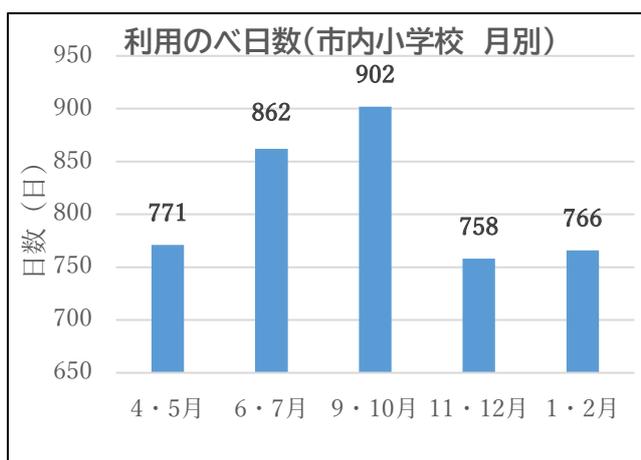


「校内すまいる」の運営を振り返って

校内教育支援センター（校内すまいる）の設置から2年が経過しました。今年度は教室環境や利用児童生徒の実態等、各学校の状況に合わせた柔軟な運営が行われています。

～校内すまいる利用状況～

不登校児童生徒の社会的自立を目標に、児童生徒が安心して過ごせる居場所の一つとして設定しています。一人一人の状況に応じて学びの場へと変化していく場合もあり、居場所を活用しながら児童生徒本人の目指す姿に向かい適切な支援を行うことが大切であると考えます。各学校において校内支援体制の見直し・改善が図られています。支援の充実に向けて、市教育支援センター（市すまいる）からもサポートできるよう努めていきます。



- ・開設時期や時間帯等、各学校で工夫した対応が行われています。
- ・どの学校においても、継続して利用する児童や学級での活動にも参加する児童等、状況に応じて柔軟に活用する様子がみられます。

～校内すまいる研修会より～

年間4回、「校内すまいる研修会」を開催しました。各校校内すまいる指導員、市校内すまいるコーディネーター、市すまいる指導員、市特別支援教育コーディネーター、市SC、市SSW、市教育委員会担当者が参集し、各校での支援状況の情報交換や市すまいるにおける支援についての情報共有をもとに支援改善に生かすことを目的としています。研修会で話題となったことを紹介します。

○心の安定を図る場所として

- ・「校内すまいる」の目指すゴールは社会的自立。まずは安心できる場所を目指す。
- ・自己決定やコミュニケーションの経験を重ねることで少しずつパワーがたまっていく。
- ・指導員の役割は児童生徒の自己決定、体験、振り返りの伴走者である。
- ・「校内すまいる」は気持ちよく過ごす経験の貴重な機会である。(マナーやルールの確認)

○児童生徒理解を基盤とした関わり

- ・児童生徒本人の自己理解、保護者の本人理解を目指す支援となるよう努める。
- ・学校（教員）との情報共有を大切にしておこなう。（学校の教職員全体の声かけ）

○今後の課題として

- ・不登校の背景には様々な要因が絡み合っており、家庭への支援が必要な場合も少なくない。保護者が相談できる場、保護者の伴走者としての役割も大切にしていく。
- ・校内すまいる利用が適切な支援の早期発見のきっかけとなるよう意識していく。

書籍・教材の紹介

今年度、生徒指導協議会で購入した書籍です。
ぜひ活用してください。



教育センター保管	各校へ配布(以下よりいずれか1冊)	
不登校からの回復の地図 明橋 大二 著	温かい教室に笑い声広がる 学級経営あそび図鑑 佐橋 慶彦 著	教師は言葉かけが9割：局面指導の NGワード×ポジティブワード 広山 隆行 著
元・しくじりママが教える不登校の子 どもが本当にしてほしいこと 鈴木 理子 著	学級担任の一日 朝から放課後まで の学級経営ルーティン 宮澤 悠維 著	令和型不登校対応マップ ゼロからわかる予防と支援ガイド 千葉 孝司 著
学級づくり&授業づくりスキル レク &アイスブレイク 多賀一郎 監修、鈴木優太 編、チーム・ロケットスタート 著	3年間まるっとおまかせ！ 中学校学級レク大事典 玉置 崇・山田貞二・福地淳宏 編著	学級づくりがうまくいく 全校一斉 方式ソーシャルスキル教育 小学校 伊佐 貢一 編集

今年度、情報教育研究会でドローンプログラミング教材「Tello-Bridge (テロブリッジ)」を購入しました。昨年度購入したToy・ドローンのプログラミングや操作を助けるものです。魚津市教育委員会主催のドローン大会でも、同じものが使用されています。子供たちがプログラミングに親しめるよう、ご活用ください。



～Column～

2月に不登校児童生徒等に対する支援推進事業支援協議会に参加しました。他市町の方と情報交換を行うと、魚津は市すまいるや校内すまいる等、子供たちの居場所づくりが充実していることに気付かされます。

市すまいる(教育支援センター)は、学校と家庭のちょうど間にある安心を取り戻すための場所です。1日10人程度の子供が利用しています。最初は出席シール貼りだけで精一杯でも、無理のない環境で過ごすうちに、少しずつ表情がやわらぎ、好きな活動に手を伸ばし、誰かと話せるようになることがあります。その変化は大きな成果ではなく、小さな安心の積み重ねです。

子供は「ひとりじゃない」と感じられる場所があれば、また前へ進む力が芽生えます。その小さな一歩を踏み出すまでの時間は人それぞれ違いますが、子供を信じて、「急がず、比べず、寄り添う姿勢」を大切にしていきたいと思えます。

